

白山ふるさと文学賞

第六回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生5・6年小説の部 優秀賞

ぼくは今日、  
星空を見に行く

蕪城小学校六年

永井ながい

新芽にいな

消毒のにおい……もう慣れた。

お母さんの泣き声……もう慣れた。

お父さんのまづいごはん……もう慣れた。

ぼくのお母さんは、もうすぐ死ぬらしい。

お母さんは体が弱い。小さいころからぼくはお父さんと二人でいることが多かった。お母さんとの記憶はほとんどない。

サーツ、桜の花弁がぼくの頭の上のつた。ぼくは中学一年生になった。小学校の卒業式来てほしかったな。来られるわけないけど。入学式いっしょに写真とりたかったな。無理だけど。

ガラガラツ お母さんの笑顔が見える。

「お母さん。りんごとプリン置いとくね。あとお水は冷蔵庫に入れとくから。じゃあ。」

「……。学校はどう？楽しい？」

「うん。楽しいよ。勉強は大変だけど。」

「そう……。よかった。あんたは少し気の弱いところがあるからお母さん心配で。」

「心配とかしなくていいからっ!!。」

お母さんの顔がサーツと白くなった。

あつ失敗。こんなこと言うために来たんじゃない。どうしよう。お母さんは体が弱いのに。

ガチャツ、カレーのにおい。

「たがいま。」

「おかえり。お母さん落ちこんでたぞ。お前に言いすぎたって。次行った時、お前から謝つとけよ。」

「うん。そうする。」

今日もカレーか。おいしそうだな。

「上手いか。」

「んっ。まづい。」

「ハハツそうか。まづいか。」明日も病院に行こう。

ガラガラツ、お母さんの顔が白い。

「おかつ」

「ねえ、お母さんもう。ダメかもしれない。」

「えっ?。」

「先生にね。言われたの。今日か明日だってお父さんのこと呼んでくれる。」

「お母さん……。昨日はごめん。お母さん、死んだら困る!!お願い死なないで……。」

「そう。フツツ、もうその言葉だけでじゅうぶん。ありがとう。ごめんね。」

その日、お母さんは静かに亡くなった。

お母さんが亡くなってから一週間後。その日の夜ぼくは夢を見た。ぼくは何才ぐらいだろうか。まだ小さい。六さいぐらいかな。

「お母さんねえ。生まれ変わったら空になりたいなあ。今みたいな星がいっぱい見える夜の空になりたい。そうしたらお父さんやあなたが何をしているかいつも分かるでしょう。もし、お母さんが死んじゃったら会いに来て。たくさんお話ししようね。」

目が覚めるとぼくは泣いていた。そうか。あの日は小学校の入学式で、お母さんが来てくれた。でもすぐに病院にもどらなきやいけなくて車に乗っていた。途中でお母さんが「ちよつと少しだけ。」と言って星空を見ていた、ほんの十分ぐらいの出来事。今思い出した。あそこに行ったらお母さんに会える。そう思った。

今日、お父さんは夜勤で帰って来ない。帰って来るとしたら翌朝の八時。今日しかないと思った。それに今日は星がキレイに見える日でお母さんが見てくれているような気がした。

「ふうー。お母さん。久しぶり。ぼく思い出したんだ。お母さんに会いに来たよ。ぼくが小さいころからお母さんは家にいなかった。運動会

の日お母さん来れなかったよね。来てほしかった。親子遠足の時、お母さんにも来てほしかった。今さらそんなこと言っても意味ないけど。お母さんにも見てほしかったし来てほしかった。お母さんが病気じゃなかったらって思ったことも何度もあった。大きくなるにつれてお母さんにひどい事ばかり言うようになった。本当にごめん。いつも病院にいてお母さんはいるけどいらないみたいだった。さびしかったよ。そんなこと言っちゃだめだと思ってがまんしてた。けどすごくさびしかったよ!!。」

ぼくはしゃべり続けた。小さな子どものように、

「お母さーん!!お母さーん!!。」

とさけびながら。  
ボーンッボーンッ、仏だんの前で話しかける。お母さんおはよう。今日はシヨゴと遊びに行く。十時半に来るって言ったのにあいつ来ないんだよ。身長が二センチメートルのびたよ。もう少しでお父さんをぬく。あとお父さん料理が上手くなったよ。お母さんに比べれば全然だけど。最近はワインにはまり出したらしい。どこがいいのかまだ正直ぼくには分からない。

ピンポーン、「おい、光いくぞー。」

シヨゴが来た。じゃあ行くね。またあとで。誕生日おめでとう。お母さん。

